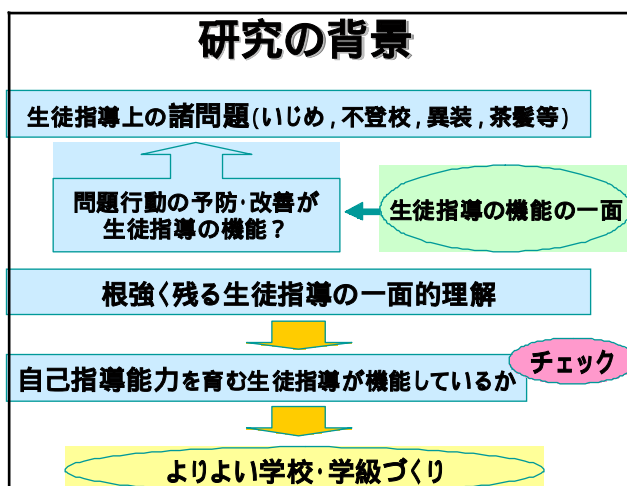


## 研究の背景

現在，生徒指導上の問題行動として，いじめ，不登校，異装，茶髪，性非行などがあげられます。各学校では，こうした問題行動の予防や改善に向け，様々な取り組みが展開され，全国，及び県内において，いじめや不登校の減少など，その効果が報告されています。しかしながら，問題行動に対する取り組みがクローズアップされるだけでは，生徒指導の真の意味を見失うことになりかねません。学校が児童生徒にとって真の学びの場になるためには，生徒指導もまた真の意味で展開される必要があります。それでは，生徒指導の真の意味とは何でしょうか。

本来，生徒指導とは，児童生徒の全体的な成長発達を援助し，「自己指導能力」をはぐくむ機能のことです。そうした機能が問題行動の予防や改善という一面的に理解され，遂行されているとしたら，児童生徒の全体的な成長発達は望めません。学校で学ぶ全ての児童生徒に対して，しかも全ての教育活動において，「自己決定」，「自己存在感」，「共感的人間関係」の三つのキーワードを大切にした取り組みが，生徒指導の真の意味に迫ることになります。この考え方を，「生徒指導の機能論」といいます（坂本，1990）。

現在，各学校において生徒指導は真の意味で機能しているのでしょうか。児童生徒に対する生徒指導上の働きかけ，各学校や学級の状態をチェックすること，そして，現在の状態を「生徒指導の機能論」に関連付けて考察することにより，よりよい学校・学級づくりのヒントが得られるのではないかと考えられます。



## 研究のねらい

客観的なデータに基づき，教育活動全体に機能する生徒指導の在り方について提言，および検証を行う。

## 研究の内容・方法（2年計画）

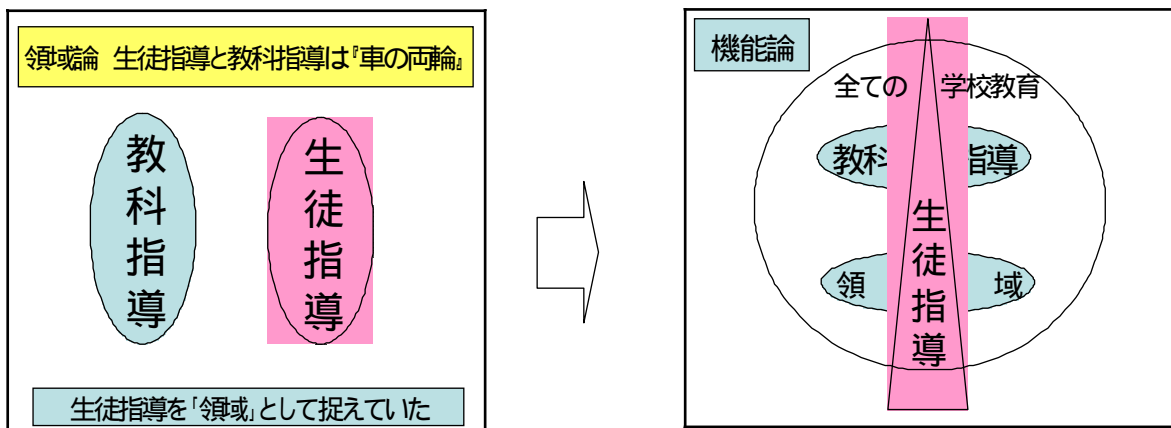
### 1年次（平成15年度）

- ・「生徒指導の機能論」についての共通理解
- ・生徒指導機能チェック表の作成
- ・生徒指導の機能状態の校種間比較
- ・生徒指導が機能する条件の整理（校種別）
- ・生徒指導が機能している学校の具体例の提示

### 2年次（平成16年度）

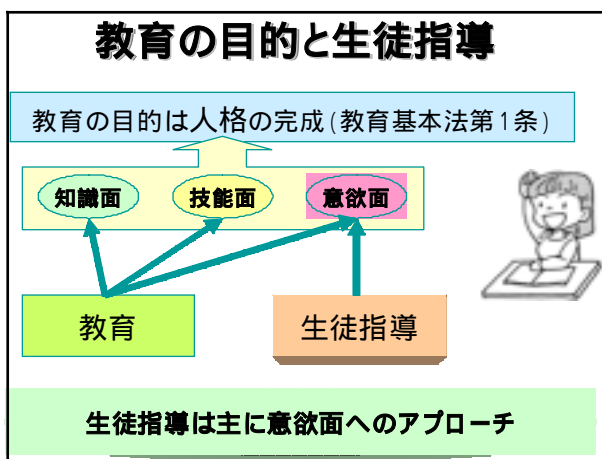
- ・事例分析に基づく生徒指導が機能する条件の整理（校種別）
- ・「生徒指導の機能論」と関連づけた具体的な対応の提示
  - ・各教科における生徒指導
  - ・各領域における生徒指導
  - ・その他

「生徒指導の機能論」とは



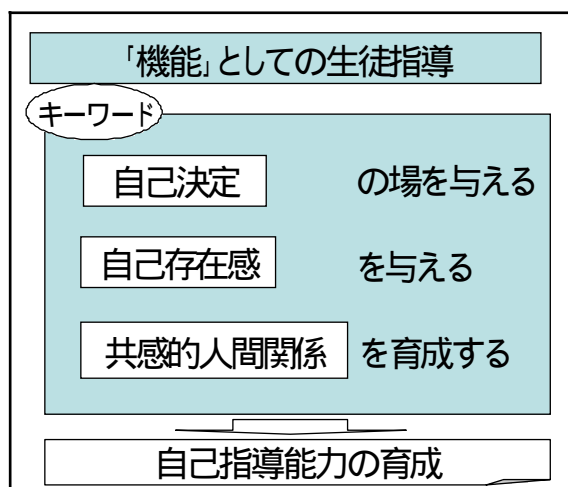
「生徒指導の領域論」とは、「教科」という指導内容にアプローチするのが教科指導であり、教科以外の内容、例えば、問題行動の指導などは「生徒指導」といい、教育は、この教科指導と生徒指導という両輪によって成り立つという考えです。

一方、「生徒指導の機能論」とは、問題行動の指導など、特定の指導内容や領域に限定されず、全ての内容、領域を指導の対象として作用するのが生徒指導であるという考えです。



教育の目的は「人格の完成」にあります(教育基本法第一条)。坂本(1990)は、「人格を構成する資質は、知識理解・技能・意欲の三つである」、「教育は三つの全てにアプローチする働きであり、生徒指導は主に意欲にアプローチする働きである」と述べています。

生徒指導は、児童生徒の意欲を育て、積極的に自己指導能力(どのような行動が適切か、自分で考え、決めて、実行する能力)を高めることをめざしています。意欲づくりのために、生徒指導はどのように機能するのか、その具体方法のキーワードが、「自己決定」、「自己存在感」、「共感的人間関係」の三つです。



## 生徒指導機能チェック表

各学校、学級における生徒指導の機能の状態をチェックするために「生徒指導機能チェック表」を作成しました。

### 1 手続き

- 平成 15 年度学校教育の指針に示された「学校における生徒指導のための共通実践事項」他の資料をもとに、「生徒指導に関する調査用紙」(別資料 1)を作成する。
- センター講座の受講教職員 418 名(小学校:200 名,中学校:117 名,高等学校:74 名,特殊教育学校:25 名,校種の未記入:2 名)に質問紙調査を実施し,データを収集する(基礎データ)。
- 収集した基礎データを統計的に処理(因子分析,主因子法,バリマックス回転)し,「生徒指導機能チェック表」を作成する。

### 2 生徒指導機能チェック表

チェック表は, A B 二つの尺度から構成されています。

#### (1) 尺度 A (表 1)

- 生徒指導が機能するための働きかけを問う尺度である。
- 統計処理の結果, 6 因子, 32 項目が抽出された。

表 1 尺度 A の因子と項目

因子	因子名	項目
	良好な関係づくり	4 児童生徒に 1 日 1 回は声をかけている 5 児童生徒を認める場面を意図的に設定している 6 児童生徒一人一人のよさや可能性を把握している 7 児童生徒の心の動きを丁寧に見ている 8 指導の中で, 優しさと厳しさを伝えている 9 児童生徒と接する場面を意図的に設定している 10 児童生徒との共感的な関係づくりに努めている 19 保護者との信頼関係づくりに努めている 27 児童生徒一人一人を生かす授業を工夫している
	指導方針の共通理解	29 保護者, 地域からの情報を共通のものにしている 30 生徒指導に関する共通の指導目標を確認している 34 問題が生じた際の連絡, 相談など, 関係諸機関との連携を行っている 37 すべての教師は, 始業のベルと同時に教室に入っている 38 校則について共通確認をして指導に当たっている 39 学期末等に生徒指導の過程, 結果を評価している 40 積極的な生徒指導(予防, 開発面)を意識して取り組んでいる 41 生徒指導の役割分担を校内で明確にしている 42 管理職あるいは生徒指導担当者は, 生徒指導に関するリーダーシップを発揮している
	問題行動への予防・初期対応	14 児童生徒の問題行動に対し個別に対応している 15 児童生徒の友人関係を把握している 17 児童生徒の遅刻や欠席に対し家庭と連絡を取っている 18 児童生徒に対する校内での指導事項を家庭に伝えている
	児童生徒に対する相談・援助	11 児童生徒との面談を行っている 12 服装や髪型等, 校則に基づいて指導している 26 児童生徒に教科に関する教育相談を行っている
	児童生徒の実態把握	32 児童生徒に対して実態把握アンケートを実施している 33 保護者に対して, 児童生徒実態把握アンケートを実施している 35 生徒指導や教育相談に関する校内研修を行っている 36 定期的な家庭訪問を行っている
	教師の自己開示	23 授業等の中で自己開示(自分を語る)をしている 24 児童生徒に「いじめは許さない」と伝えている 25 児童生徒に学年, 学級のルールを伝えている

(2) 尺度 B (表 2)

- ・ 生徒指導の機能状態を問う尺度である。
- ・ 統計処理の結果，4 因子，24 項目が抽出された。

表 2 尺度 B の因子と項目

因子	因子名	項目
	健康で落ち着きのある学校・学級	7 教室や黒板に落書きがある 8 校内の器物（窓ガラス，壁，机等）が壊されている 10 不登校の児童生徒が増加傾向にある 11 遊び・非行型の不登校児童生徒がいる 12 問題を一人で抱え込んでいる同僚がいる 13 地域など，外部からの苦情がある 14 遅刻，早退，無届欠席がある 15 服装，髪型の問題が見られる 16 問題行動は「本人の自由意思の問題」と考える雰囲気がある 24 校内で窃盗が見られる 29 病気や怪我以外で保健室に行く児童生徒がいる （* 上記項目は全て逆転項目）
	規律の正しい学校・学級	18 始業のベルが鳴ってもなかなか席につかない 19 授業が始まって，机に教科書が用意されていない 20 教室が汚れている（ゴミが落ちている等） 21 掃除の仕方が雑である 22 言葉づかいが乱れたり，粗暴であったりする 32 授業中ぼんやりしている児童生徒がいる （* 上記項目は全て逆転項目）
	児童生徒と教師，児童生徒間に触れ合いのある学校・学級	1 児童生徒との信頼関係がある 2 児童生徒同士の仲がよい 3 児童生徒はすべきことを理解し，主体的に行動している 4 学級内に互いに協力し合う雰囲気がある 9 気持ちの弱い子どもも笑顔でいられる学級づくりができている
	職員間に触れ合いのある学校・学級	41 職員同士の関係がよい 42 問題が生じた時，管理職に相談ができる

3 使い方

(1) 生徒指導をチェックする尺度 A (32 問)，尺度 B (24 問) の質問に回答する。回答は尺度 A については，「4 ; いつもする，3 ; だいたいする，2 ; あまりしない，1 ; 全くしない」，尺度 B については，「4 ; かなりある，3 ; ややある，2 ; あまりない，1 ; 全くない」から選択して，番号に をつける。

\* 尺度 B については，項目により逆転項目のものも含まれる。それらについては，得点を逆にして配置してある。

(2) 各因子ごとに，合計得点，平均点を記入する。

(3) 判定基準をもとに，自校の生徒指導の機能状態を把握する。

4 <校種別> 生徒指導の機能状態の判定基準

校種別に、各因子平均得点の下位群から上位群にかけて 20 %のCuttingポイントによる判定基準及び度数分布表（一部）を示します。

表3 校種別判定基準

小学校	A	A	A	A	A	A	B	B	B	B
下位 ~ 20%	~2.8	~2.6	~2.8	~1.7	~2.3	~2.7	~3.2	~2.5	~2.8	~2.5
▲ ~ 40%	~3.0	~2.9	~3.0	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~2.8	~3.0	~3.0
□ ~ 60%	~3.1	~3.1	~3.3	~2.3	~2.8	~3.3	~3.6	~3.0	~3.2	~3.5
▼ ~ 80%	~3.3	~3.4	~3.5	~2.7	~3.3	~3.7	~3.8	~3.3	~3.4	~3.5
上位 ~ 100%	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0

中学校	A	A	A	A	A	A	B	B	B	B
下位 ~ 20%	~2.8	~2.8	~3.0	~2.7	~2.5	~3.0	~2.6	~2.5	~2.8	~2.5
▲ ~ 40%	~3.0	~3.0	~3.3	~3.0	~2.8	~3.3	~3.0	~2.8	~3.0	~3.0
□ ~ 60%	~3.1	~3.2	~3.5	~3.0	~3.0	~3.3	~3.3	~3.0	~3.2	~3.5
▼ ~ 80%	~3.3	~3.4	~3.8	~3.3	~3.5	~3.7	~3.5	~3.3	~3.4	~3.5
上位 ~ 100%	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0

高等学校	A	A	A	A	A	A	B	B	B	B
下位 ~ 20%	~2.7	~2.6	~2.5	~2.3	~1.8	~2.7	~2.3	~2.0	~2.6	~2.5
▲ ~ 40%	~2.9	~2.9	~2.8	~2.7	~2.3	~3.0	~2.5	~2.3	~2.8	~3.0
□ ~ 60%	~3.1	~3.1	~3.3	~3.0	~2.5	~3.3	~2.8	~2.8	~3.0	~3.0
▼ ~ 80%	~3.2	~3.3	~3.5	~3.0	~2.8	~3.3	~2.9	~3.0	~3.4	~3.5
上位 ~ 100%	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0

特殊教育学校	A	A	A	A	A	A	B	B	B	B
下位 ~ 20%	~3.3	~2.7	~3.3	~1.3	~2.0	~2.3	~2.8	~2.5	~2.8	~3.0
▲ ~ 40%	~3.6	~3.0	~3.5	~2.0	~2.8	~3.0	~3.3	~2.8	~3.2	~3.0
□ ~ 60%	~3.8	~3.3	~3.8	~2.7	~3.5	~3.7	~3.5	~3.2	~3.4	~3.5
▼ ~ 80%	~4.0	~3.6	~4.0	~3.0	~3.8	~4.0	~3.7	~3.8	~3.6	~4.0
上位 ~ 100%	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0	~4.0

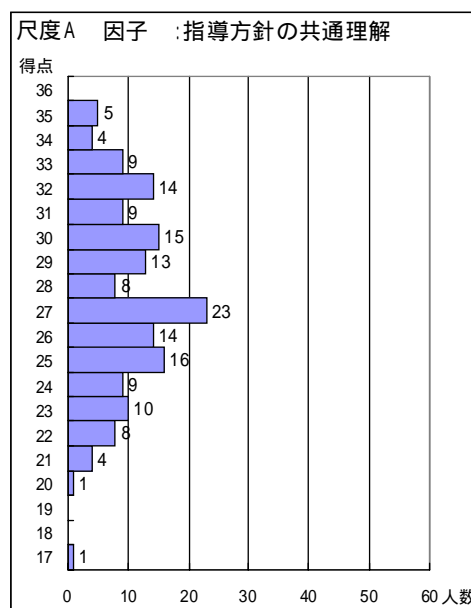
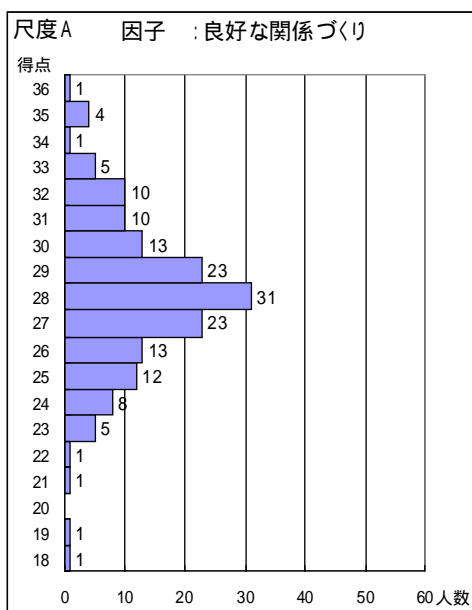


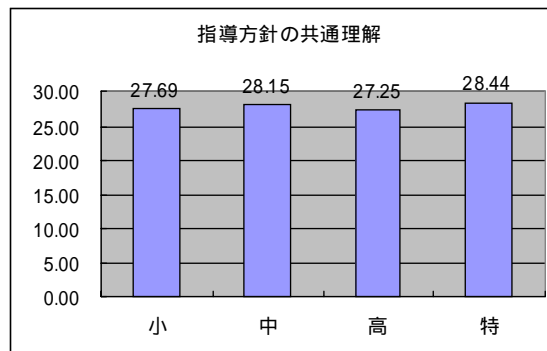
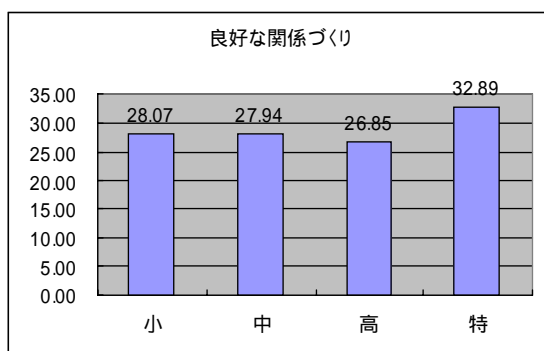
図1 度数分布表（小学校一部）

## 校種間比較に見る生徒指導の機能状態

小学校，中学校，高等学校，特殊教育学校における生徒指導の機能状態を比較しました。基礎データから「生徒指導チェック表」の質問項目に欠損値のあるものを削除して抽出されたデータ（小学校：163名，中学校：99名，高等学校：65名，特殊教育学校：18名）を用い，チェック表の尺度A，Bの各因子ごとに合計得点，及び学校ごとに平均値を算出し，統計的手法（分散分析；ANOVA）により分析を行いました。

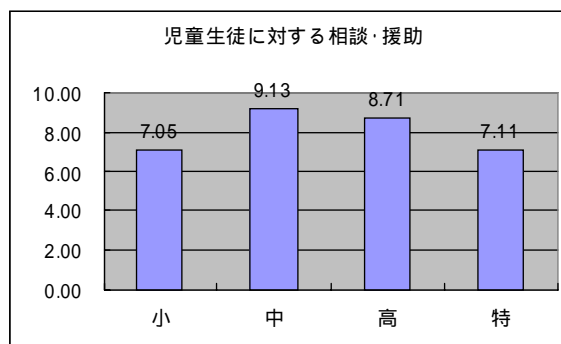
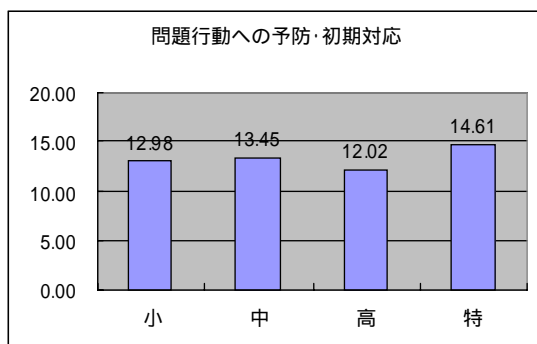
\*以下，枠内のコメントは，全て統計的に意味のあるものです。

### 1 尺度A因子について



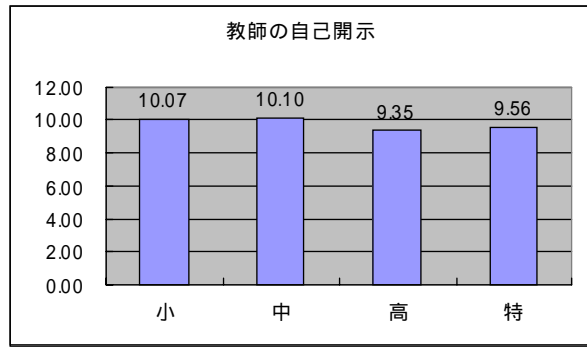
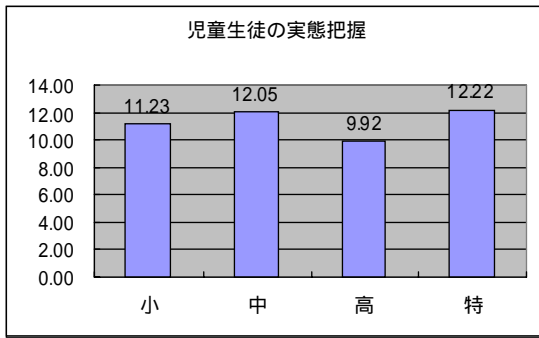
特殊教育学校は，他校種に比べて得点が高い。  
小・中学校は，高等学校に比べて得点が高い。

学校間に差は認められない。



特殊教育学校は，他校種に比べて得点が高い。  
小・中学校は，高等学校に比べて得点が高い。  
さらに，中学校は小学校に比べても得点が高い。

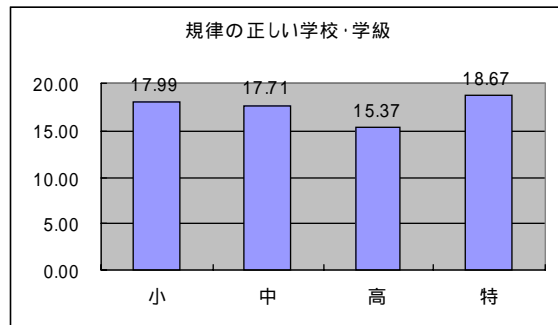
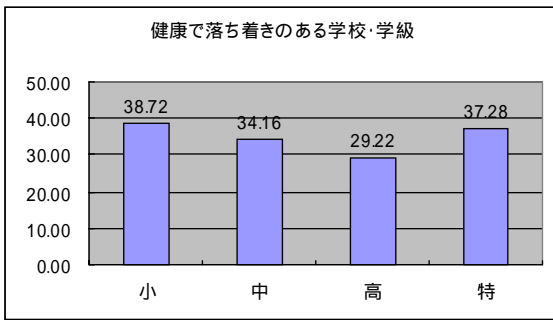
中学校，高等学校は，小学校，特殊教育学校に比べて得点が高い。



小・中，特殊教育学校は，高等学校に比べて実態把握得点が高い。さらに，中学校は小学校に比べても得点が高い。

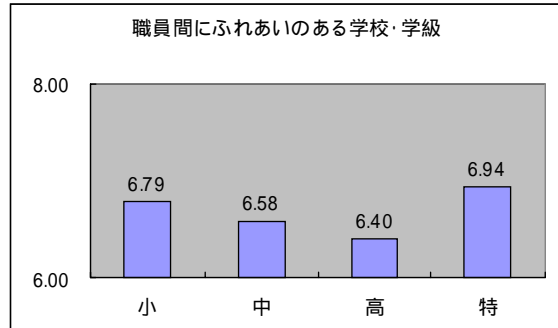
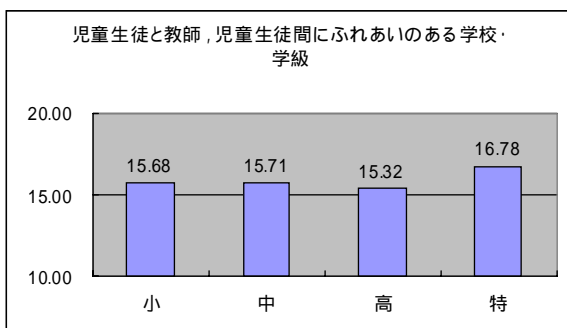
小・中学校は，高等学校に比べて得点が高い。

## 2 尺度 B 因子について



小学校，特殊教育学校は，中学校，高等学校に比べて得点が高い。中学校は，高等学校に比べて得点が高い。

高等学校は，他校種に比べて得点が高い。



特殊教育学校は，他校種に比べ得点が高い。

小学校は，高等学校に比べ得点が高い。

<校種別> 生徒指導が機能する条件

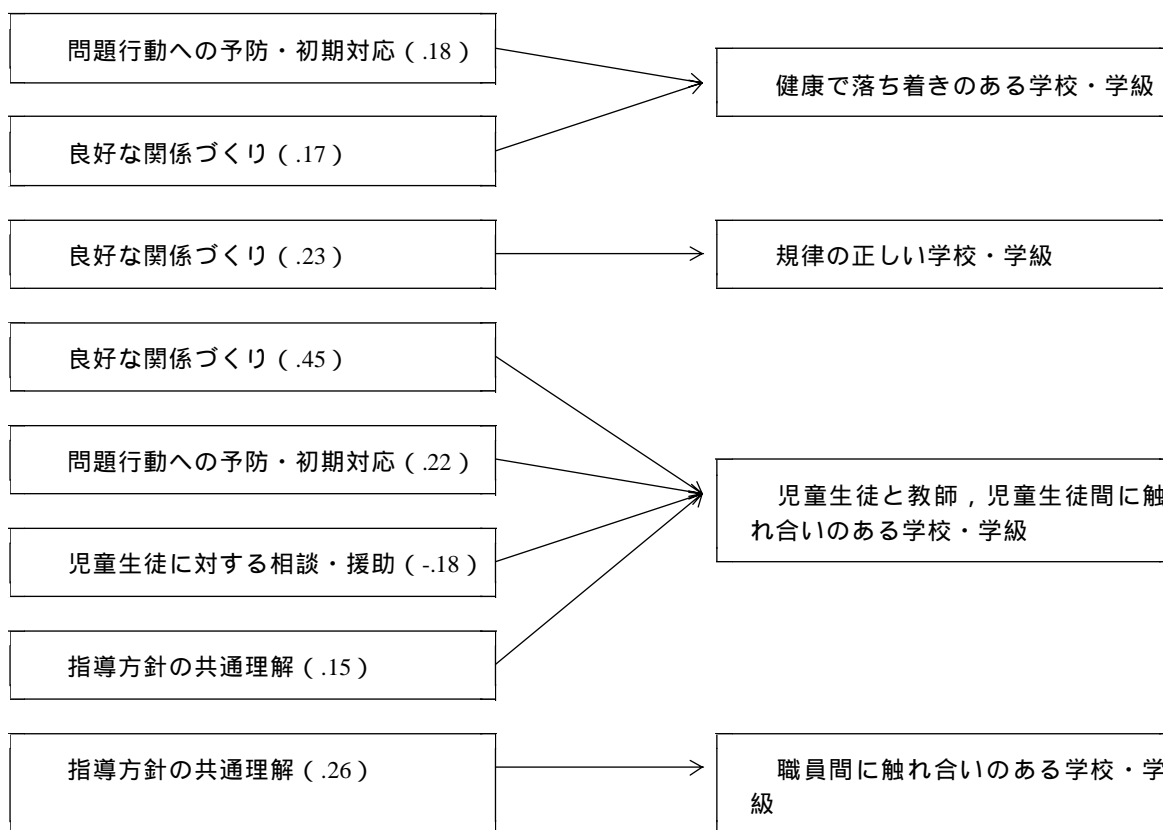
小学校，中学校，高等学校，特殊教育学校の各校種において，どのような働きかけをしていくと生徒指導が機能し，児童生徒を豊かにはぐくむことができるのでしょうか。

本研究では，生徒指導が機能する条件を探るため，統計的手法（段階的重回帰分析）による分析を行い，校種別に，「尺度Bの各因子に対する尺度Aの各因子の影響」，「尺度Bの各因子に対する尺度Aの各質問項目の影響」を明らかにしました。

なお，因果モデルの括弧内に示した数値は影響力の強さを示しています。正の数値は，矢印で結ばれた両因子が正の相関関係にあることを示し，負の数値は，負の相関関係にあることを示しています。

1 小学校 (n = 163)

(1) 尺度Aの各因子 尺度Bの各因子



小学校においては，「良好な関係づくり」が特に大切であり，続いて，「問題行動への予防・初期対応」，「指導方針の共通理解」に関する働きかけが大切であることが示されました。なお，「児童生徒に対する相談・援助」は負の相関が示されました。これは，「現在，児童生徒と教師，児童生徒間に触れ合いのある学校・学級であるので，特に相談・援助の働きかけをしていない」という読みとりができるのではないかと考えられます。

(2) 尺度 A の各質問項目 尺度 B の各因子

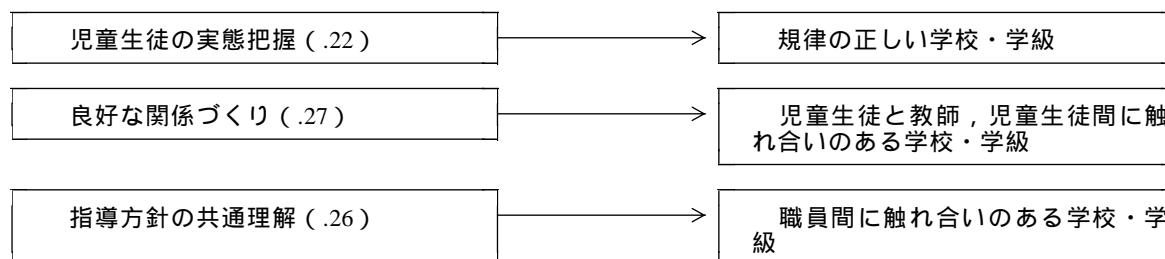


小学校において、生徒指導が機能する条件を細かく見ていくと、最も影響力が強かったり、複数に渡って項目が挙げられたりしているのは、「すべての教師は、始業のベルと同時に教室に入っている」、「保護者との信頼関係づくりに努めている」、「児童生徒の友人関係を把握している」という項目であることが示されました。なお、負の相関が示された項目については、生徒指導が機能しているために、特に働きかけていないという読みとりができると考えられます。

2 中学校 ( n = 99 )

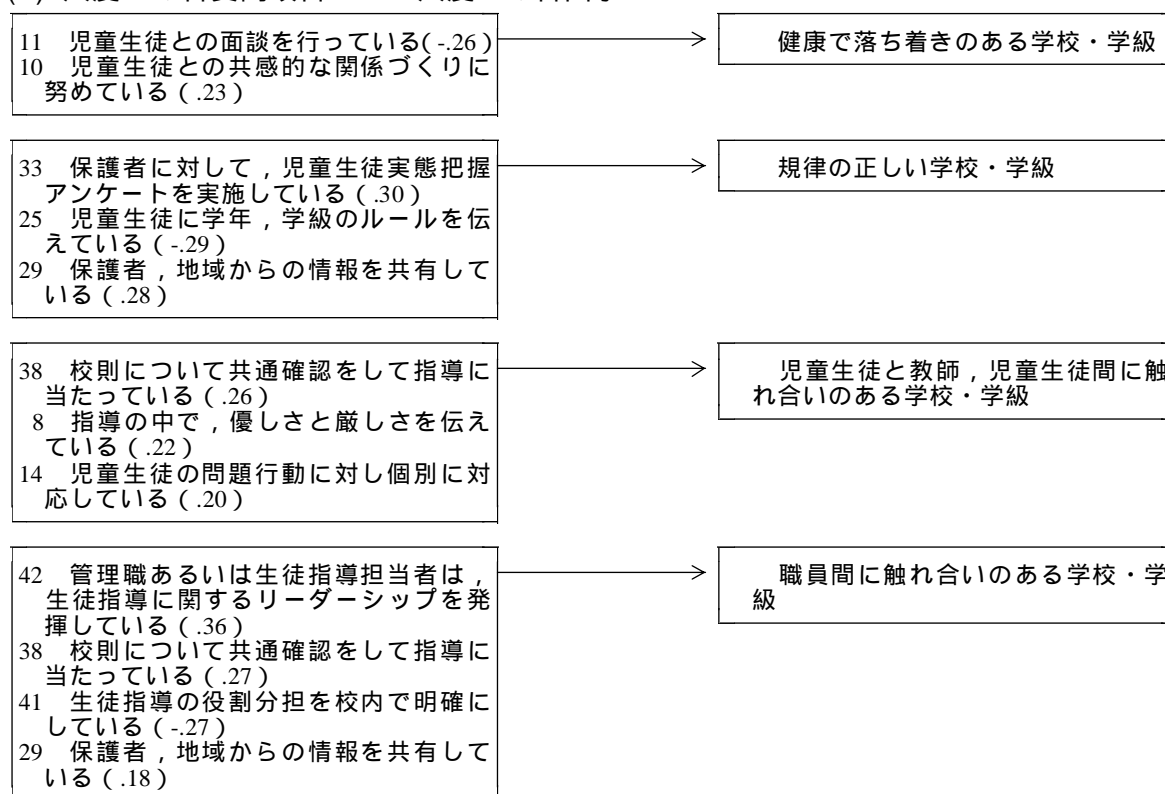
(1) 尺度 A の各因子 尺度 B の各因子

\* 「健康で落ち着きのある学校・学級」に対する影響は示されなかった。



中学校においては、「良好な関係づくり」、「指導方針の共通理解」、「児童生徒の実態把握」に関する働きかけが大切であることが示されました。

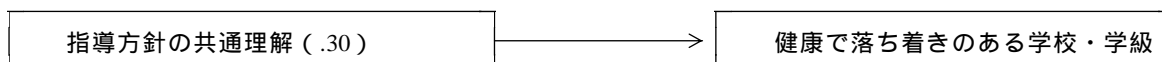
(2) 尺度 A の各質問項目 尺度 B の各因子



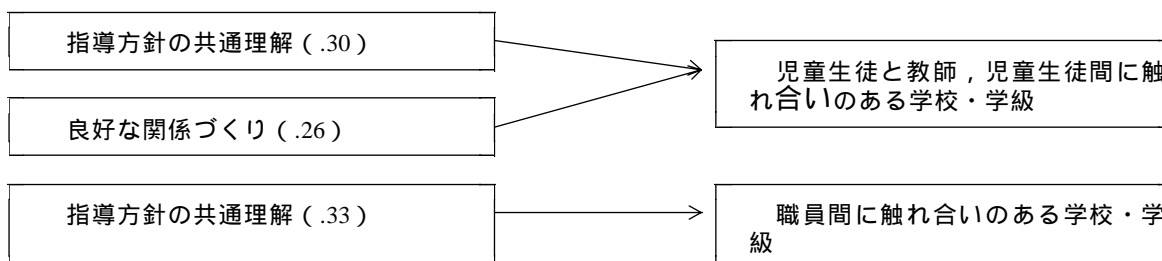
中学校において, 生徒指導が機能する条件を細かく見ていくと, 最も影響力が強かったり, 複数に渡って項目が挙げられたりしているのは, 「管理職あるいは生徒指導担当者は, 生徒指導に関するリーダーシップを發揮している」、「校則について共通確認して指導に当たっている」、「保護者, 地域からの情報を共有している」といふ項目であることが示されました。なお, 負の相関が示された項目については, 生徒指導が機能しているために, 特に働きかけていないという読みとりが考えられます。

3 高等学校 (n = 65)

(1) 尺度 A の各因子 尺度 B の各因子

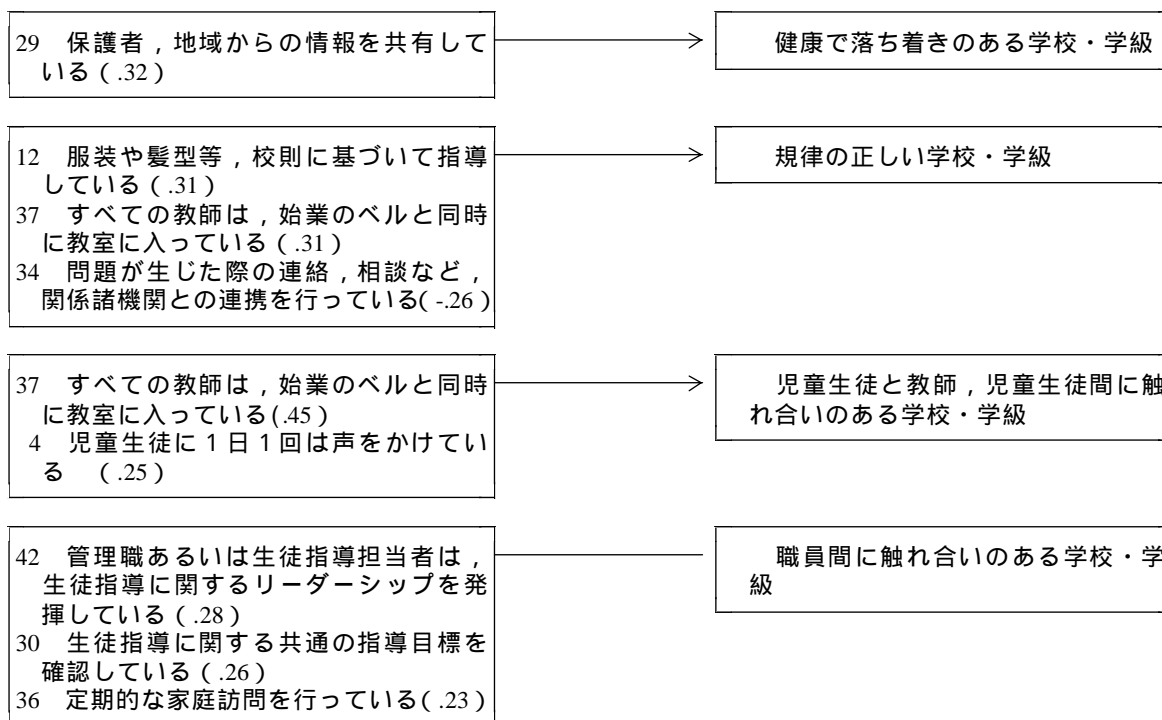


\* 「規律の正しい学校・学級」に対する影響変数は示されなかった。



高等学校においては、「指導方針の共通理解」、「良好な関係づくり」に関する働きかけが大切であることが示されました。

(2) 尺度 A の各質問項目 尺度 B の各因子

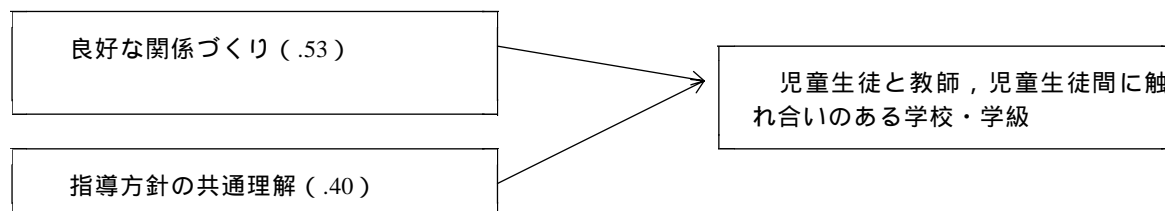


高等学校において，生徒指導が機能する条件を細かく見ていくと，最も影響力が強かったり，複数に渡って項目が挙げられたりしているのは，「すべての教師は，始業のベルと同時に教室に入っている」という項目であることが示されました。なお，負の相関が示された項目については，生徒指導が機能しているために，特に働きかけていないという読みとりができますと考えられます。

#### 4 特殊教育学校 (n = 18)

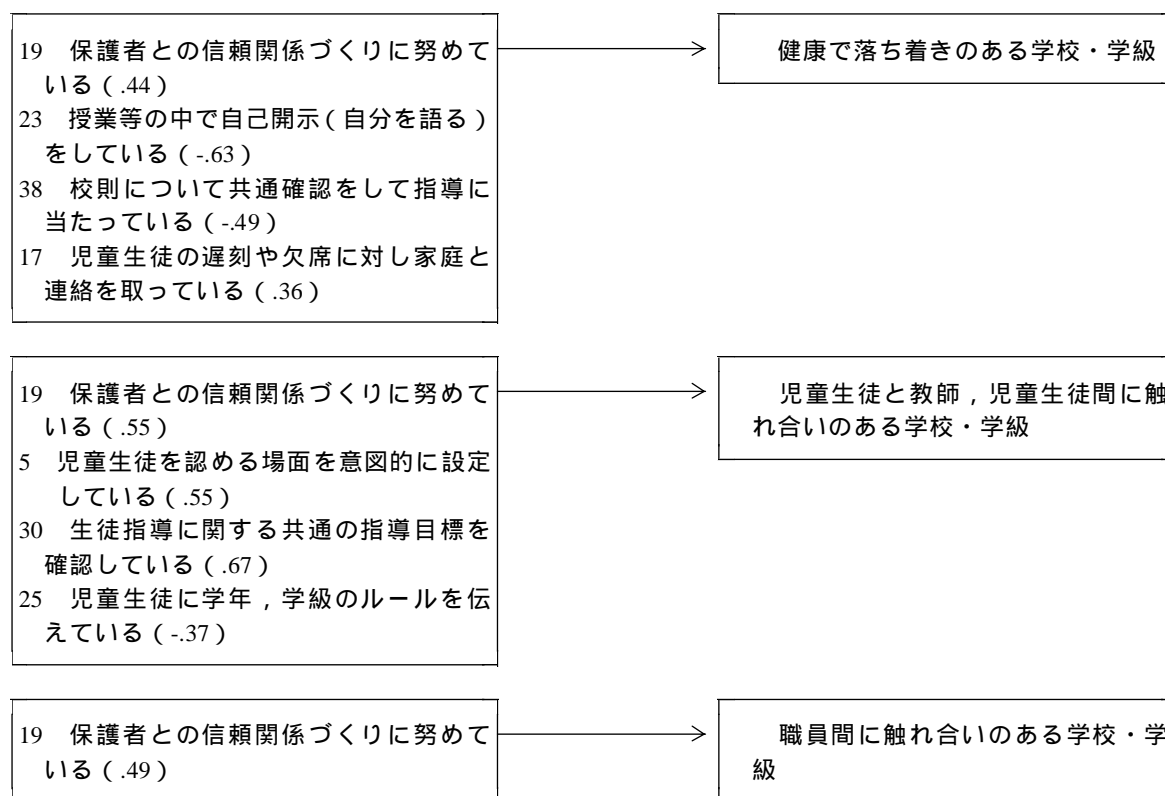
##### (1) 尺度 A の各因子 尺度 B の各因子

\* 「健康で落ち着いた学校・学級」、「規律の正しい学校・学級」、「職員間に触れ合いのある学校・学級」に対する影響変数は示されなかった。



特殊教育学校においては、「良好な関係づくり」、「指導方針の共通理解」に関する働きかけが大切であることが示されました。

##### (2) 尺度 A の各質問項目 尺度 B の各因子



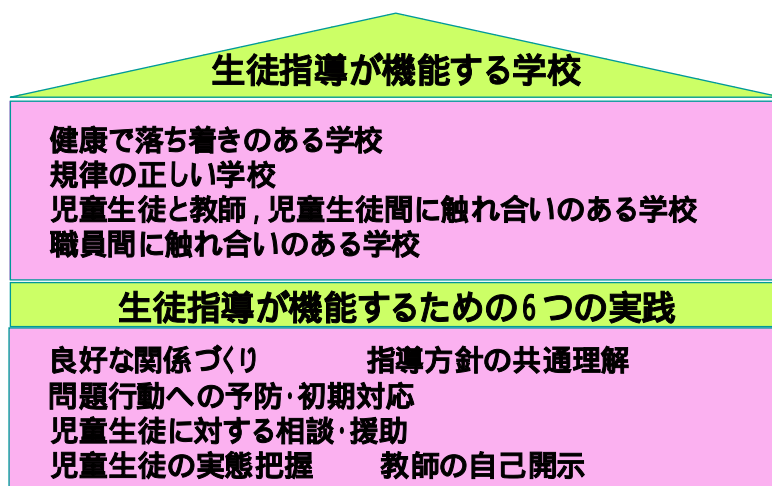
特殊教育学校において、生徒指導が機能する条件を細かく見ていくと、最も影響力が強かったり、複数に渡って項目が挙げられたりしているのは、「保護者との信頼関係づくりに努めている」という項目であることが示されました。なお、負の相関が示された項目については、生徒指導が機能しているために、特に働きかけていないという読みとりができると考えられます。

生徒指導が機能している具体例

### 1 生徒指導が機能している学校とは

生徒指導は「いつでも、どこでも、誰にでも」といわれますが、教師が何の研修もせず自己流の生徒指導で児童生徒に対応するとすれば、そこに十分な生徒指導が展開されるのは難しいと思われます。本研究において、収集データに基づいて整理された「生徒指導が機能している学校」からは、真の生徒指導に結び付く多くの示唆を得ることができます。

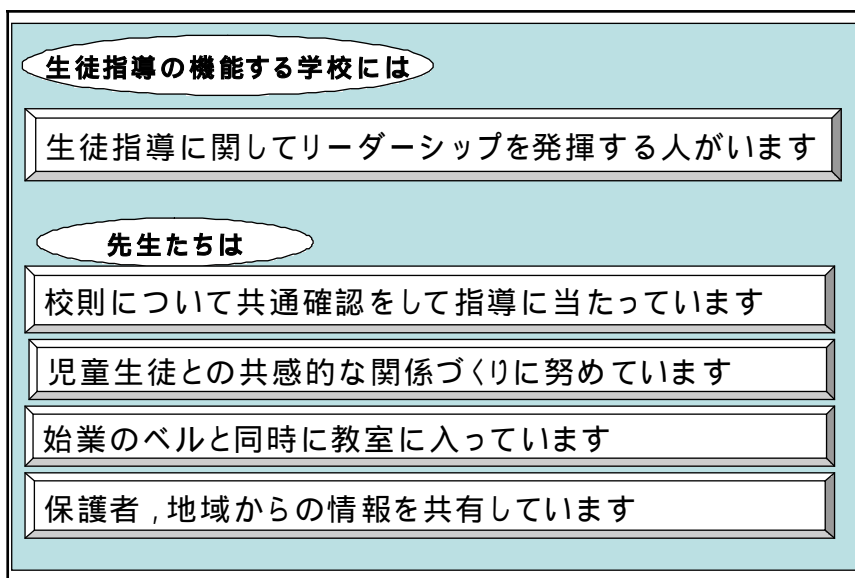
## 生徒指導が機能している学校とは



「生徒指導が機能している学校」の状態（尺度Bの4因子）は、「機能するための働きかけの実践」（尺度Aの6因子）と密接な関係があります。この実践を参考に、各学校で取り組むことに取り組んでもらいたいと思います。

### 2 共通の実践内容

生徒指導が機能している学校の共通の実践内容として、次のことが挙げられます。



学校という組織にはリーダーシップが必要です。そのもとで共通理解し、全員で取り組んでいく事が大切です。

児童生徒との関係づくりが大事なことは勿論ですが、特に、一緒に努力するという姿勢が重要です。

### 3 <校種別> 実践内容

生徒指導が機能している学校を校種別にみたととき、「2 共通の実践内容」に加え、次のような取り組みが、それぞれにより結果に結び付くものとして挙げられます。

#### 小学校

一人一人のよさや可能性を把握しています
一人一人を生かす授業を工夫しています
友人関係を把握しています
「いじめは許さない」と伝えています
保護者との信頼関係づくりに努めています

教師の健全な価値観が大きく作用します。いじめを許さない、一人一人のことをよく分かってくれる強く優しい教師に守られ、児童生徒が自分は認められているという実感をもてるような取り組みが、生徒指導が機能する学校づくりに結び付いています。

#### 中学校

指導の中で優しさと厳しさを伝えています
生徒の問題行動に対し個別に対応しています
保護者に対して児童生徒実態アンケートを実施しています

発達段階や最近の問題行動の動向などから、個に応じた優しさと厳しさが必要になっています。また保護者と連携して指導・援助することも、生徒指導が機能する学校づくりに結び付いています。

#### 高等学校

生徒指導に関する共通の指導目標を確認しています
服装や髪型など、校則に基づいて指導しています
生徒に1日に1回は声をかけています
定期的な家庭訪問を行っています

教職員の数が比較的多く、遠距離通学生や親元を離れて生活する生徒もいます。「全職員が共通理解をして、きめ細かな生徒指導を実践する」ということが、生徒指導の機能する学校づくりに結び付いています。

#### 特殊教育学校

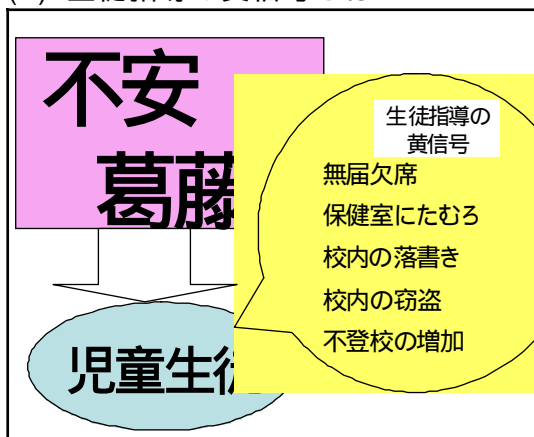
生徒指導に関する共通の指導目標を確認している
児童生徒を認める場面を意図的に設定している
児童生徒の遅刻や欠席に対して家庭と連絡を取っている
保護者との信頼関係づくりに努めています

チーム・ティーチングで取り組むことが多い特殊教育学校では、こまめに共通の指導目標を確認して、児童生徒に対応する必要があります。

また、障害のために児童生徒だけでは難しいことやできないことがあります。スモールステップで自信をもたせたり、保護者との連携や信頼関係づくりが他の校種より一層重要になっています。

#### 4 生徒指導の黄色信号

##### (1) 生徒指導の黄信号とは



「生徒指導が機能している学校」の調査結果（尺度B 因子得点，別資料4）から，得点の低かったデータ 20%を抽出し，そこから浮かび上がってきた項目を，生徒指導が機能しなくなる前の黄信号としました。

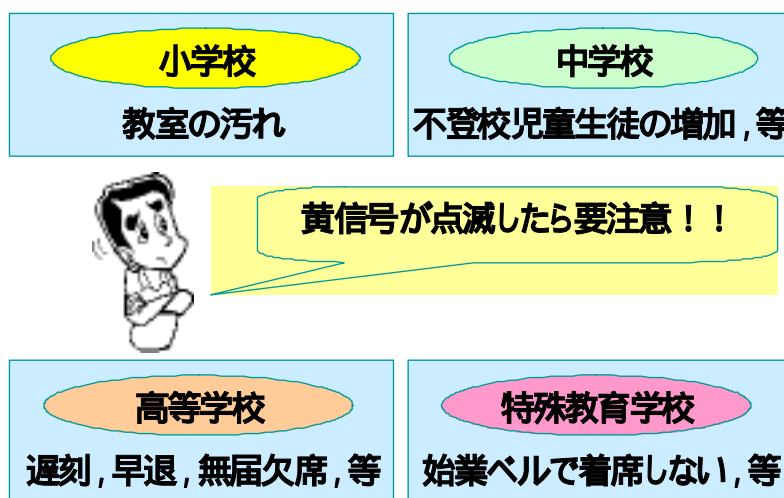
これらの生徒指導の黄信号は，児童生徒が不安・葛藤（ストレス）に押しつぶされそうになったときに表れる SOS のサインとみることができます。

**生徒指導の黄信号**

言葉づかいが乱れたり，粗暴であったりする  
掃除の仕方が雑である  
服装，髪型の問題がみられる  
授業が始まって机に教科書が用意されていない  
地域など，外部からの苦情がある

**4校種中，3校種以上に共通している項目**

### 生徒指導の黄信号 校種別追加項目



## (2) 生徒指導の黄信号が点減したときには

### 『対応を検討』する際のルール

「もし、うまくいっていることであれば  
その対応を続けましょう」

「もし、一度うまくいった対応があれば、  
それをもう一度やってみましょう」

「もし、うまくいかないのであれば、何か  
違うことをしましょう」

「ブリーフ・セラピーのルール」を参考に

生徒指導が機能する学校づくりを目指すとき、今までの対応の在り方を見直してみる必要があります。

現在の取り組みの中に、これからも継続していく価値のあるものがあるはずで、それを再確認します。

自校における過去の取り組みや他校の取り組みの中にも、もう一度やってみる価値のあるものがあると思います。それを探してみます。

一つの取り組みを長い期間実践しているが、改善に結びつかないという場合には、その方策がどんなに素晴らしいもの

でも「今は、自分の学校には合わない方策」と考える必要があります。

正しく見える方策を捨てるには勇気が必要ですが、「もしうまくいかないのであれば、何か違うことをする」という勇気も必要です。

ほんの少しだけ今のやり方を変える（小さな変化を起こす）ことで、うまくいくときもあります。

## 5 生徒指導が機能するための3つのチェックポイント

黄信号が点減した時は勿論、青信号の時（平常時）であっても、生徒指導が機能するための3つのチェックポイントを確認しながら学校づくりをする必要があります。

このことによって、問題行動の未然防止と共に生徒指導が機能する学校づくりが可能になっていきます。「2 共通の実践内容」「3 校種別実践内容」であげた取り組みを、この機能するための3つのチェックポイントの視点から見てください。

### (1) 学校が自己決定の場になっていますか

決められたことを決められたとおりやる生活の中では、自己指導能力は育ちません。教師は勇気をもって児童生徒に自己決定の場を与えていかなければなりません。

しかし、席替えや班決めを児童生徒にまかせたばかりにトラブルが生じたという話をよく聞きます。班決めの前には「自分もまわりのみんなも同じくらい満足できる班決めをするんだよ」、「ひとりでも泣く子がいたら、先生が決め直すからね」などと、事前に行動選択の基本について教師が指導する必要があります。

### 生徒指導が機能するための3つのチェックポイント

その1 自己決定の場  
自分(自分たち)で考えて、決めて、  
実行する場を発達段階に応じて与える



例えば 授業の中で、席替えで、班づくりで・・・  
選択の自由を与える

#### 留意事項

- ・行動選択の基本については教師が指導する
- ・選択の自由は、児童生徒が自分で責任をとれる範囲で与える

## 校則について共通確認をして指導に当たっています

生徒指導が機能している学校では、校則についての共通理解のもとで指導が行われています。校則指導の際には「行動選択の基本は教師が指導し、児童生徒が自分（自分たち）で責任をとれる範囲で選択の自由を与える」ということを共通認識しておく必要があります。これは、児童生徒に自己決定の場を与える際の基本となります。

校則づくりの際に、児童生徒に選択の自由を与えることは、自ら校則を守る児童生徒の育成に結び付いていきます。

(2) 学校が自己存在感が  
得られる場になってい  
ますか

### 生徒指導が機能するための3つのチェックポイント

#### その2 自己存在感

自分は価値のある存在だという実感を与える

例えば

- ・ さん、と名前と呼ぶ
- ・ 病気で休んだ子どもが登校したら声をかける
- ・ テストや宿題、個人ノートなどに、その子どものみに通用するコメントを書く
- ・ 学級通信に月に1回は全員が載るようにする



## 児童生徒に1日に1回は声をかけています

生徒指導が機能している高等学校では、「生徒に一日一回は声をかける」という取り組みを実践していました。同様の取り組みをしているが、うまく機能していないというケースもあります。その原因の一つが、「いわゆる普通の子」に声がかかっていなかったという例です。また、発表や勉強が苦手な児童生徒に、うまく声かけができないという場合もあります。

児童生徒にとって、学校生活で大きなウェイトを占めているのは授業時間です。この時間に自己存在感を与えることが重要です。その際、参考になるのが、生徒指導が機能している小学校と特殊教育学校の次の取り組みです。

一人一人を生かす授業を工夫しています

一人一人のよさや可能性を把握しています


児童生徒を認める場面を意図的に設定しています

(3) 学校が共感的人間関係を育成する場になっていますか

### 生徒指導が機能するための3つのチェックポイント

**その3 共感的人間関係**  
共に努力する姿勢を基盤とし、教育相談を生かした対応をする

例えば  
・教師も始業のベルと同時に教室に入る



児童生徒と「共に実践」するとき、真の受容と共感(カウンセリングマインド)が生まれ、共感的人間関係が築かれる

児童生徒との共感的な関係づくりに努めています

保護者、地域からの情報を共有しています

生徒指導が機能する学校の多くは、「児童生徒との共感的な関係づくり」に努めています。共感的な関係づくりのためには、児童生徒理解が必要になります。日頃の観察記録の他に、「保護者や地域からの情報を共有する」取り組みも欠かせません。

また、共感的な関係づくりのためには、児童生徒と「共に努力する姿勢」を基盤としながら、児童生徒を理解する方法を身に付け、個とつながっていくことが大切です。

始業のベルと同時に教室に入っています

例えば、始業のベルと共に教師が教室に入るとき、まさにそこでは共感的人間関係が育成されているといえます。

教師が児童生徒と共に歩むとき、「たいへんだね」「つらいね」「でも、がんばろうね」という言葉が、リップサービス(偽りのカウンセリングマインド)ではなく、真の受容と共感に満ちた言葉(真のカウンセリングマインド)になり児童生徒の心に響きます。

学校を「共感的人間関係を育成する場」とするためには、教師が児童生徒と「共に」の姿勢で取り組む体験が必要です。こうした体験を多くもった教師の言葉は、真のカウンセリングマインドに満ちた言葉となり、児童生徒は、教師の生き様から「共感的人間関係」を学んでいくこととなります。

## 成果と課題

### 1 成果

#### 客観的な分析から得られた事実に基づく提言ができたこと

「各学校において、問題行動の指導にのみ焦点を当てた生徒指導ではなく、教育活動全体に機能する生徒指導がどのくらい行われているのか」、また、「どのような条件によって生徒指導は機能するのか」等について、統計処理に基づいた客観的な分析を行ったことは、当センターの生徒指導分野の研究に関しては初の試みといえます。学校現場で児童生徒にかかわりをもつ教師からのデータは重みがあり、それを基にして明らかになった「生徒指導チェック表」、「生徒指導の機能状態の校種間比較」、「生徒指導が機能する条件」は、データから得られた事実です。その事実から、例えば、「小学校ではすると生徒指導がうまく機能し、児童を豊かにはぐくむことができ、よりよい学校や学級づくりができるのではないか」等の提言を示すことができたのは今年度の大きな成果であると考えています。

### 2 課題

本年度の研究を経て、次のような課題が示されました。次年度、生徒指導関係の研修講座の中で、具体的な演習等を通して、データ収集を考えています。

#### 事例分析によるデータの収集

本研究における全ての統計処理のベースになる「生徒指導機能チェック表」は、尺度A、Bの項目が生徒指導に関する多様な内容全てをチェックしているわけではありません。統計処理によって導かれた提言だけではなく、各学校の具体的な事例分析に基づく効果的な働きかけ等を提言することも必要です。

#### 「生徒指導の機能論」との関連付け

坂本（1990）は、「生徒指導は教育における重要な機能である。全ての教育活動に、自己決定、自己存在感、共感的人間関係を具体的な方法として作用させることで、児童生徒の自己指導能力を高めることができる」という「生徒指導の機能論」を提唱しています。本研究で得られた知見を、「機能論」とどのように関連付けて整理するかということが大きな課題です。

#### < 主な参考・引用文献 >

- 岩淵千明．(1997)．『あなたもできるデータの処理と解析』．東京：福村出版．  
松尾太加志・中村知靖．(2002)．『誰も教えてくれなかった因子分析』．東京：北大路書房  
宮田敬一．(1998)．『学校におけるブリーフセラピー』．東京：金剛出版．  
森 俊夫．(2000)．『先生のためのやさしいブリーフセラピー』．東京：ほんの森出版  
坂本昇一．(1990)．『生徒指導の機能と方法』．東京：文教書院．  
坂本昇一．(1998)．『< 子どもの心 > を癒し育てる』．東京：小学館．  
田中 敏・山際勇一郎．(1989)．『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』．東京：教育出版．  
秋田県教育委員会．(2003)．『平成 15 年度学校教育の指針』．秋田県教育委員会．  
秋田県総合教育センター．(1997)．研究紀要『いじめの根絶をめざして』．  
秋田県総合教育センター．(1999)．研究紀要『タイプや状態に応じた不登校児童生徒への対応』．  
秋田県総合教育センター．(2001)．研究紀要『心を育てる学校教育相談の在り方』．  
秋田県総合教育センター．(2003)．研究紀要『生徒指導における危機管理の在り方』．

